

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論 文 題 目

S-HTP における現代青年の描画特徴の研究
— 新たな描画指標の構築に向けて —

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 大学院 教育発達科学研究科・教授 森田 美弥子

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・教授 松本 真理子

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・准教授 永田 雅子

論文審査の結果の要旨

Synthetic House-Tree-Person Technique (統合型 HTP 描画法：以下、S-HTP) は、1 枚の紙に「家」「木」「人」を含めて自由に描く課題である。病院臨床や学校臨床などの実践で用いられている。最近では、青年期における S-HTP の時代的变化が指摘されるようになり、「未熟化」「抑うつ傾向」といった心理的特徴との関連が注目された。それらは陰影や透視画、人間描写の簡略化など、従来の描画研究において臨床的な指標と考えられてきたものに加え、視点の混在や年齢不相応に幼い表現などが増えていることに示されていると考えられた。

そこで本論文では、現代青年の心理的特徴がどのように描画に表現されるかをとらえ、それをもとに S-HTP の新たな描画指標を作成することを目的として、延べ約 400 名の大学生を対象とした 3 回の調査を行い、分析・検討した。論文の構成と各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、先ず S-HTP の特徴と研究史が概観されている。1970 年代に考案され、精神医療の場で主に統合失調症者の描画特徴の検討にもとづいた病理指標や解釈仮説の構築、発達の視点からの検討など、基盤となる研究が行われ (三上, 1995)、2000 年頃からは教育、福祉、司法臨床の領域でも用いられるようになり、研究も多様な応用展開を見せている。その中で、一般青年の S-HTP における「統合性」の低下 (三沢, 2008) という問題提起に注目し、青年期心性の「未熟化」と「抑うつ傾向」の増加という時代的变化をふまえて新たな描画指標の必要性を論じた。

第 2 章と第 3 章では、青年の未熟化の一要因とされる、幼少期からのコミュニケーション経験と S-HTP 描画特徴との関連を検討した。ここでは、S-HTP の全体・家・人・木のそれぞれを評定する計 111 項目を用いた。

第 2 章では、親の養育態度に着目し、Parental Bonding Instrument (PBI : Parker et al, 1979) 日本語版を用いて、大学生 80 名に調査を行った。4 群に分類された養育態度のうち、愛情と自立承認群において統合性が高いとの仮説をたてたが検証されず、むしろ干渉群で高く、また、無関心群において現実社会への関わりが不十分と見られる描画特徴が示された。

第 3 章では、友人との交流態度に着目し、103 名の大学生を対象として「友人とどのようにつきあっているか」を尋ね、自由記述による回答を求めた。その内容から「信頼し、内面を見せられる友人がいるか」という観点により 4 群に分類し、社交群・信頼群・距離群・希薄群と名付けた。比較検討した結果、統合性の高さについては 4 群で違いが見られず、これは「平面的」「付加物の少なさ」などの共通した描画特徴が影響しているためではないかと考えられた。

論文審査の結果の要旨

養育態度や友人との交流態度による描画特徴の違いは明確には示されなかったが、対象者全体に共通して、統合性の低さ、不安の高さや内的エネルギーの乏しさなど、未熟化や抑うつ傾向に通ずる特徴が見られ、詳細な質的検討が必要であると考えられた。

そこで第4章では、現代青年のS-HTPに多数出現する「全体または一部に見られる、1枚の絵としての調和を欠き、違和感を生じさせる描画特徴」を「異質表現」と定義し、新たな評定項目を作成し、抑うつ傾向との関連を検討した。

評定項目作成にあたっては、これまでに収集した計412名のS-HTPから異質表現と認められる描画特徴を抽出し、従来描画指標として取り上げられてきたものも参考にしながら、論文提出者を含めた3名の臨床心理学研究者による検討を重ねて、最終的に12項目（①多視点、②透視画、③空間の偏り、④人の簡略化、⑤全体の簡略化、⑥強迫的、⑦過剰な陰影、⑧夜・雨の風景、⑨過大な太陽、⑩一部の突出、⑪アニミズム、⑫不安定な描線）を設定し、異質表現カテゴリーとした。全対象者の77.4%に異質表現が出現し、多く見られた項目は「過剰な陰影」「多視点」「人の簡略化」「空間の偏り」であった。

さらに、うち225名には日本版ベック抑うつ質問票第2版（BDI-II：Beck et al, 1996）を合わせて実施し、異質表現カテゴリー各項目の有無によりBDI得点の差が見られるかどうかを検討した。その結果、「空間の偏り」「全体の簡略化」「強迫的」「過剰な陰影」「夜・雨の風景」の5項目が抑うつ指標と位置付けられた。なお、異質表現を示した対象者の約8割は1項目または2項目のみで、最大5項目まで分布していたが、3項目の者が最もBDI得点が高かった。

第5章では、異質表現カテゴリーの臨床的応用可能性を確認するため事例検討を行った。主に抑うつ症状を訴え、BDI-IIで中等度から重症レベルに該当した学生相談9事例において、全員のS-HTPで抑うつ指標項目が見られた。さらに、学校不適応を呈した小学生7事例の検討からは、抑うつ指標は自傷行為のある児童など一部に見られたのみであったが、異質表現は全員に出現しており、青年期以外の発達段階でも有用なアセスメント・ツールとなり得ることが示唆された。

第6章は総括的討論として研究全体を概観し、S-HTPに表現された現代青年の特徴を考察するとともに、時代的变化をふまえた新たな指標を提起する意義を論じた。今後の課題として、異質表現カテゴリー、特に抑うつ指標となる5項目のさらなる検討のため、臨床群や異なる発達段階を対象とした研究が必要であることを述べた。

論文審査の結果の要旨

以上の論文内容について審査委員会は慎重に審議を行い、次のような問題点の指摘や助言がなされた。①養育態度と描画特徴について、Ⅲ群（過干渉）における統合性の高さをどう見るか、また、母親と父親の組合せから把握する必要もあるのではないかと、動物を描くことは現代的特徴として興味深い、親の養育態度との関連はあるかどうか、②異質表現カテゴリー作成プロセスの中で、評定項目の設定手順についてやや説明不足のところがある、③各評定項目の有無によりBDI得点の差があるかを見ているが、抑うつ水準も加味することにより、臨床的な指標の意味づけを明確にできるのではないかと、④S-HTPの臨床的有用性、他の描画法との違いは何か、あるいは他の描画法への応用について考えるとよい、⑤新たな描画指標の体系化を目指して、対象者を拡大するなど今後の展開が期待される。

これらは申請者においても十分認識されており、今後研究を継続する中で、さらに深めていく予定である旨の説明がなされた。以上の点を含め本論文は、今後の心理臨床実践においてS-HTPを活用していくための有意義な知見を提供しており、意欲的な研究であることは高く評価された。S-HTPの研究はまだ少なく、解釈理論を充実させることにより、臨床心理アセスメントの発展に寄与し得る学術的意義があると判断された。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。